「令和２年度（2020 年度）卒業生アンケート」
大学教育への満足度および学修状況に関する項目の分析

筑波学院大学 IR 担当

調査の概要

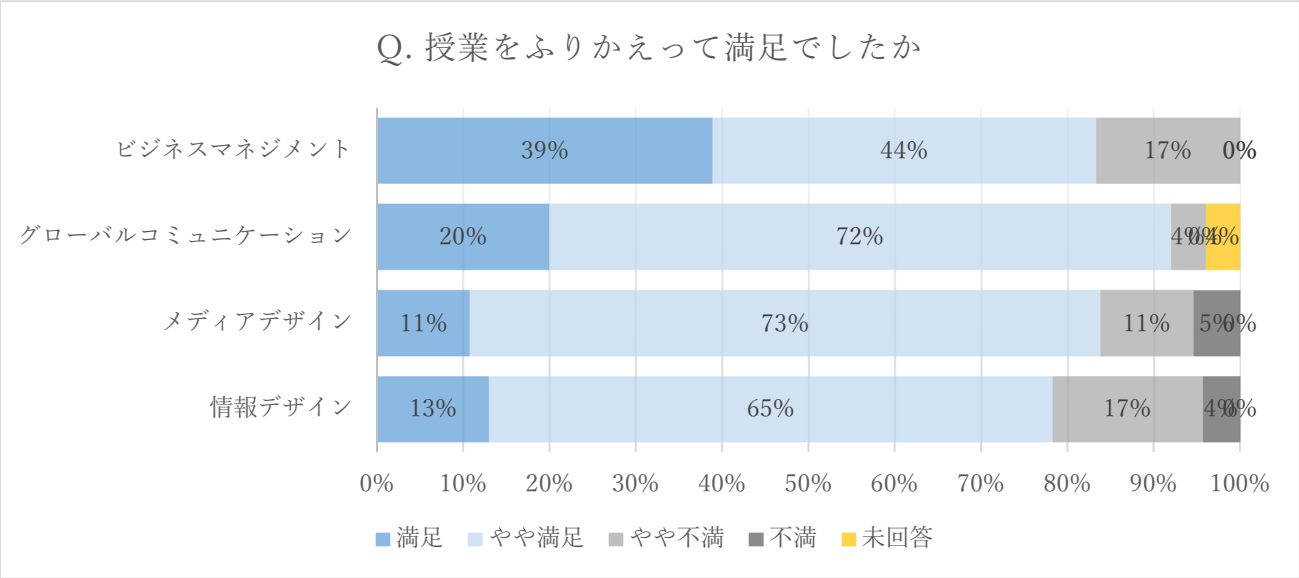
筑波学院大学では，昨年度の卒業生を対象に「令和元年度卒業生アンケート」を実施している。調査項目は学生生活や経済支援に関する項目まで多岐にわたるが，本稿では卒業生の大学教育への満足度および 4 年間の学修状況に関する自己評価を分析し，これからの教育の改善に活用するものである。

実施時期：2021 年 3 月 12 日（卒業式）
調査対象：2020 年度 経営情報学部卒業生
調査方法：卒業生を対象とした全数調査，質問紙によるアンケート方式で実施
調査目的（アンケート教示文より）：
この調査は、本学がより良い教育の実現を目指すために行うものです。ご協力をお願いします。
該当する項目に〇をつけてください。
なお、この調査は無記名で提出してください。本調査以外の目的で使用することはありません。

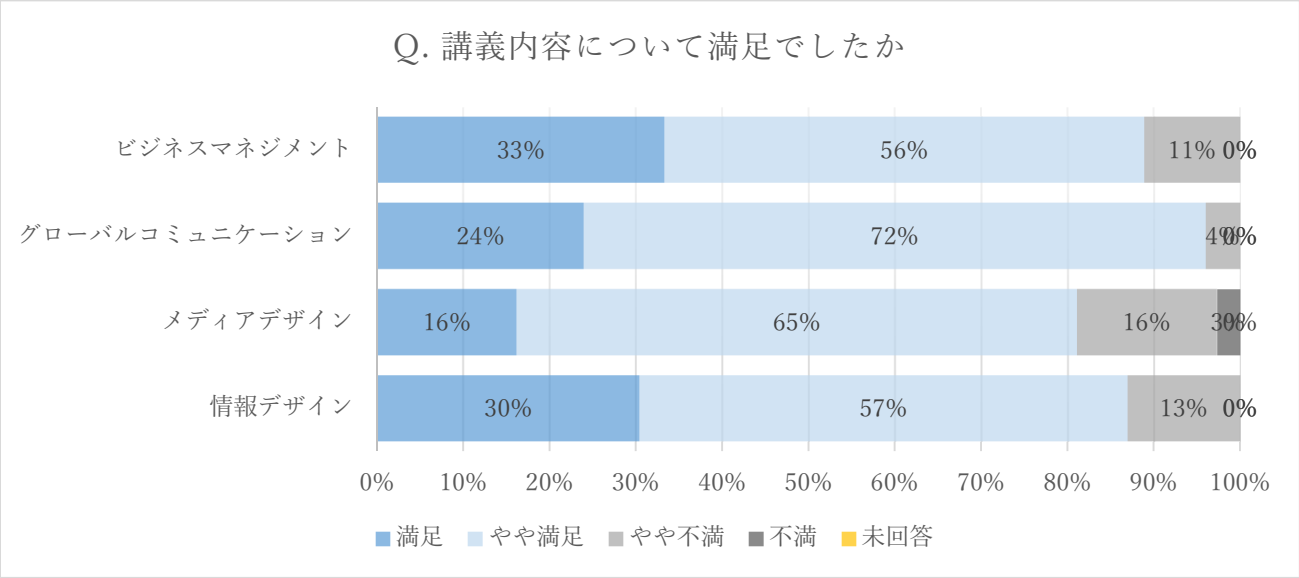
回答者数

専攻したコース	回答者数
ビジネスマネジメント（BM）	18 名
グローバルコミュニケーション（GC）	25 名
メディアデザイン（MD）	37 名
情報デザイン（ID）	23 名
（未回答）	3 名
計	106 名

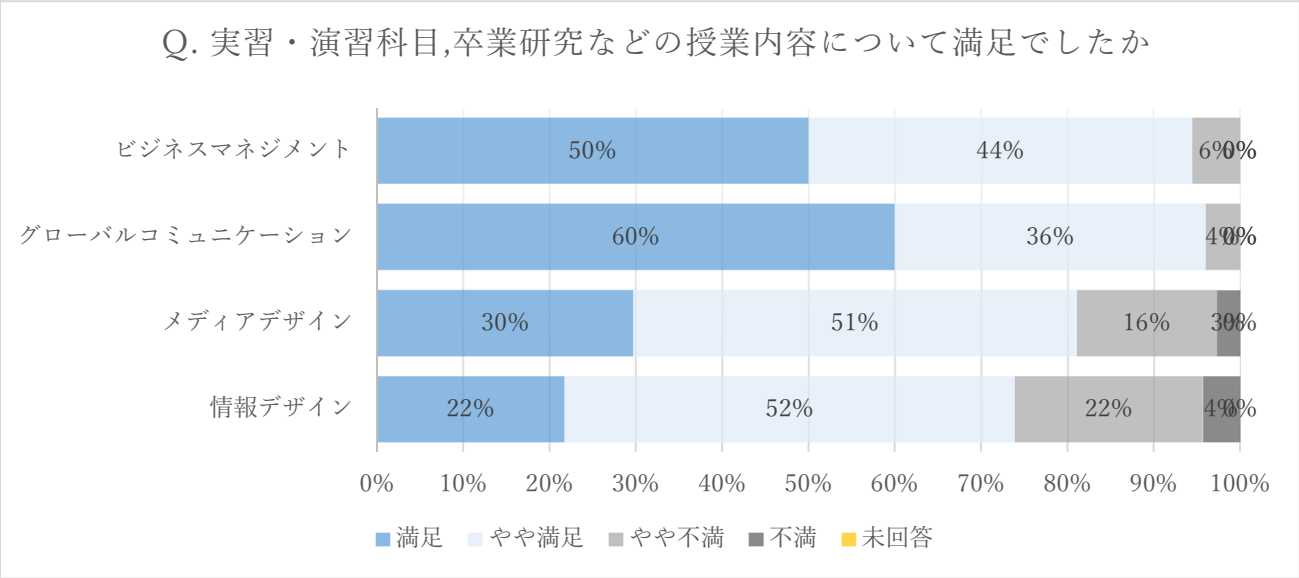
調査結果「大学教育への満足度」より



授業全体への評価は概ね肯定的なものとなっていた。一部「不満」の評価があるが，特定のコース科目に対しての評価とは捉えず，慎重に精査することが望まれる。前年度との比較からは，「満足」の割合にバラつきが認められる（BM コースを高く評価する学生が多い一方，MD，ID コースを評価する学生が相対的に低かった）。

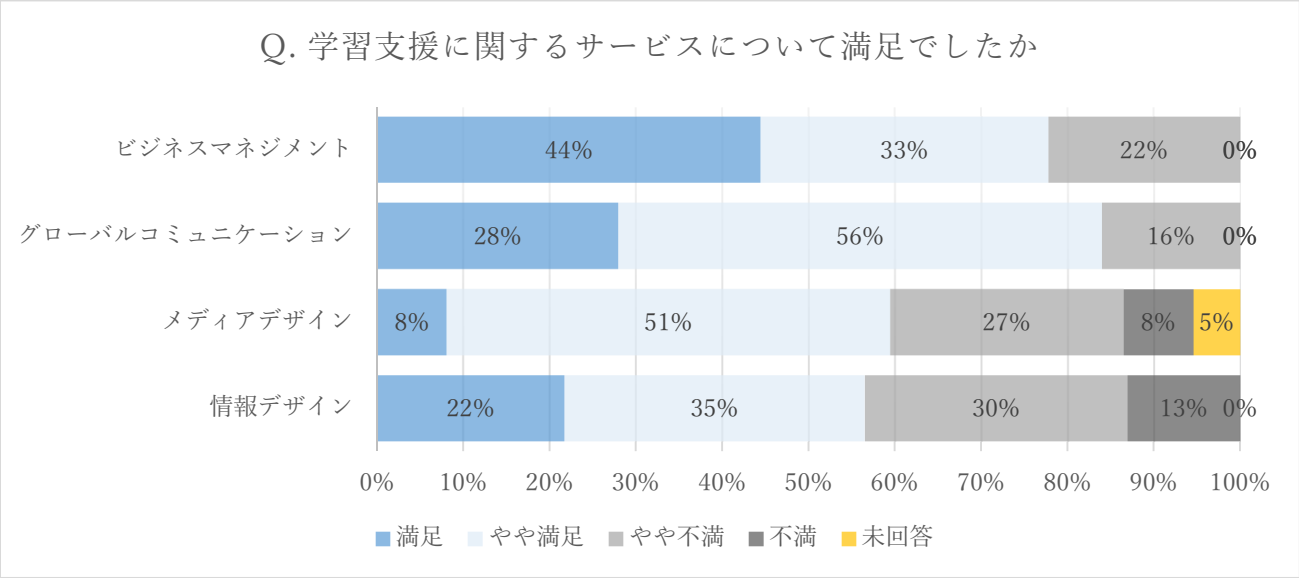


講義内容への評価は概ね肯定的なものとなっていた。コースごとに比較すると，ID コースの満足度が前年度より高く，不満度が低くなっていた。また本年度の特徴としては，MD コースを専攻した学生の「満足」の割合が前年度に比べ低く，「不満」を示す学生が一部含まれていた点にあった。



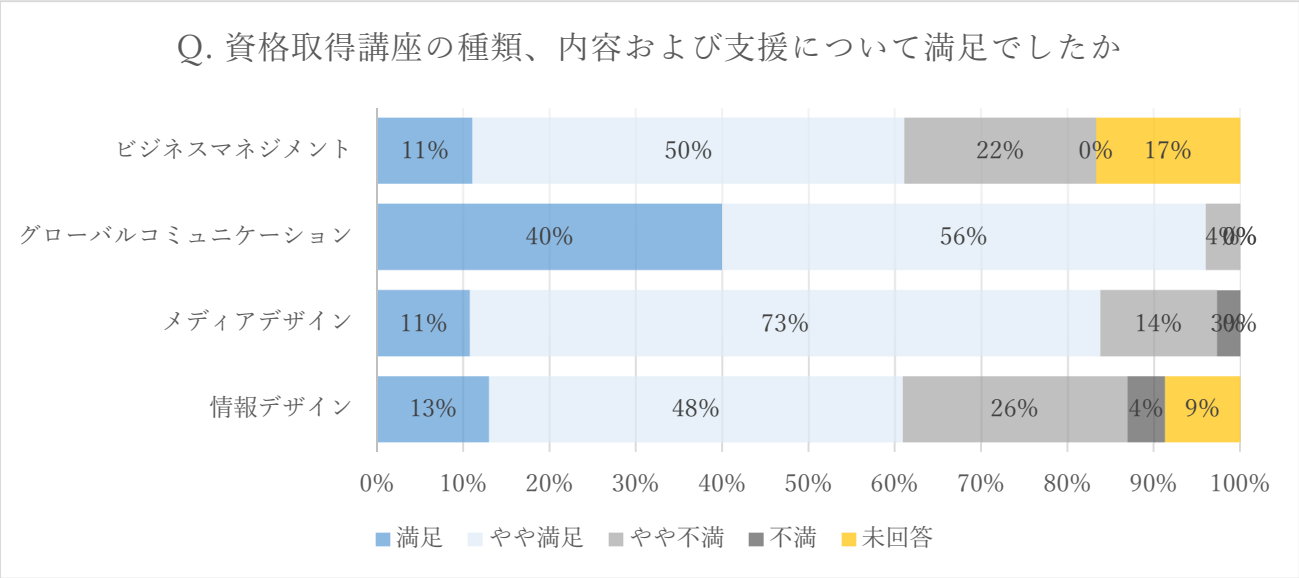
実習・演習系科目の満足度については，前出の回答と比較してコース毎の「やや満足」と「満足」の割合が異なった。BM・GC コースの満足度が高くなっている一方，MD・ID コースの不満足の傾向が高くなっていた。

実習・演習系科目の満足度については，最終学年（2020 年度）全面的にオンライン授業で対応したことが関与しているものと考えられる。Web 会議システムを使用した卒業研究等の指導は，特に卒業制作が必要になる MD・ID コースの授業では困難であったことが複数教員から報告もされており，それらを反映した結果だったことが伺える。感染症予防対策の教務上の措置は今後も起こり得ることであり，個別指導が多くなる科目でどのように対処すべきかは，大学全体で考える必要があろう。



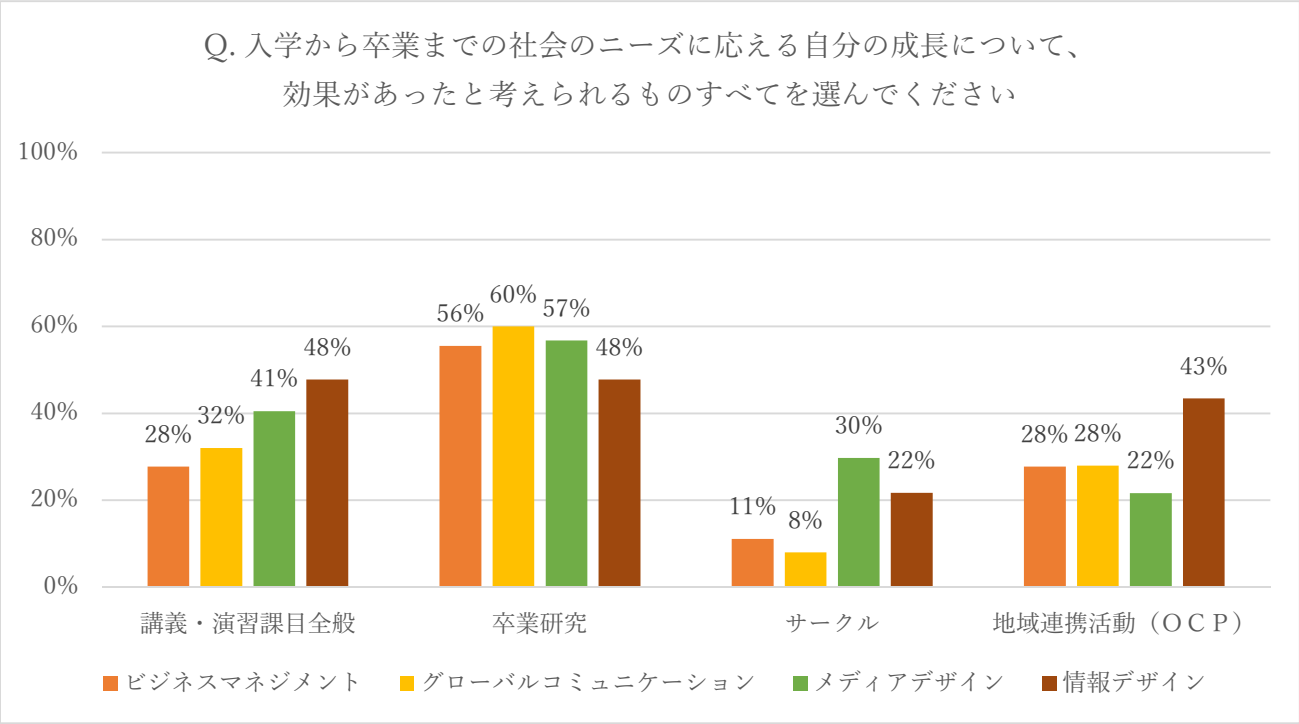
学習支援サービスについては否定的な評価が多く，前年度と比較しても大幅な傾向の違いはなかった。通常のカリキュラム以外での多様な支援を求めていたことが伺え，それに訴求するサービスを教学側か

ら提供されなかった点は今後の課題であろう。



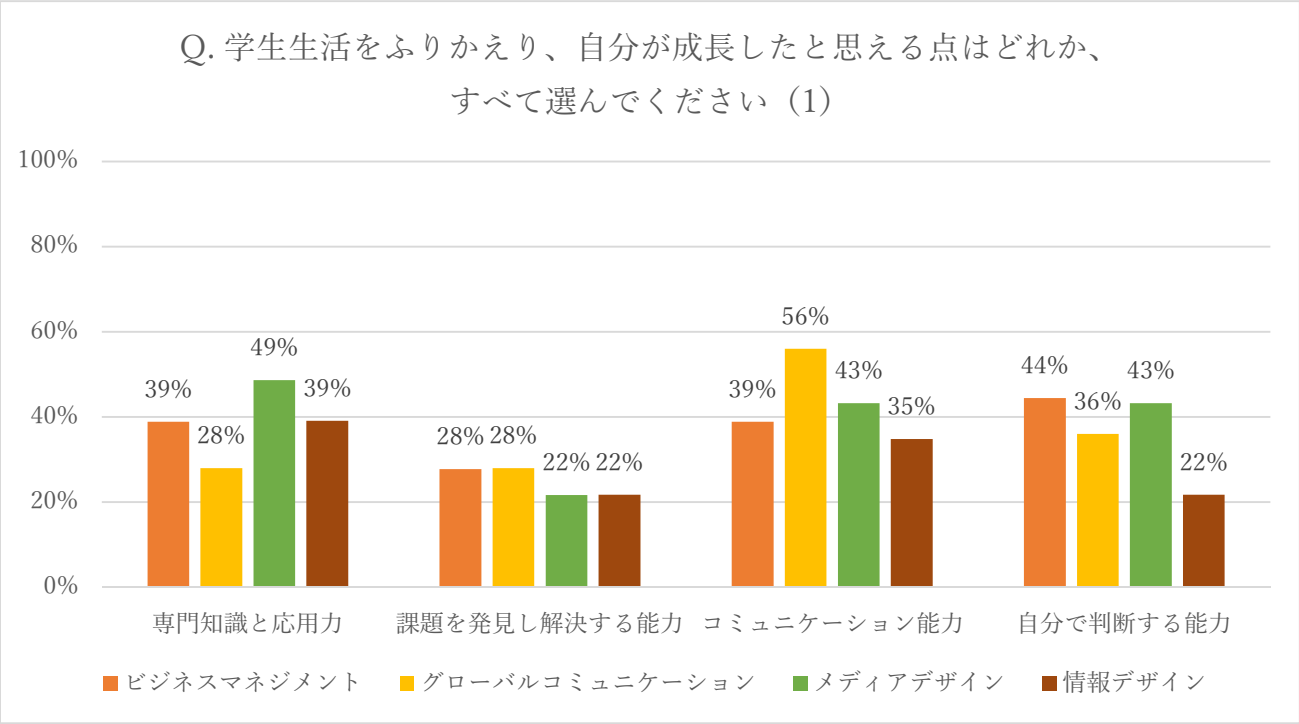
前年度と比較して，他コースは傾向の変化がなかった一方で，ＧＣコースの満足度が全体的に高くなっていた。この改善については原因が特定出来てない（コース担当教員の個別対応までは報告されてない)。だが，ＧＣコースが中心となる英語関連資格の支援は今後大学全体として強化する必要もある。そのためには現状を客観的に検証すべきであろう。

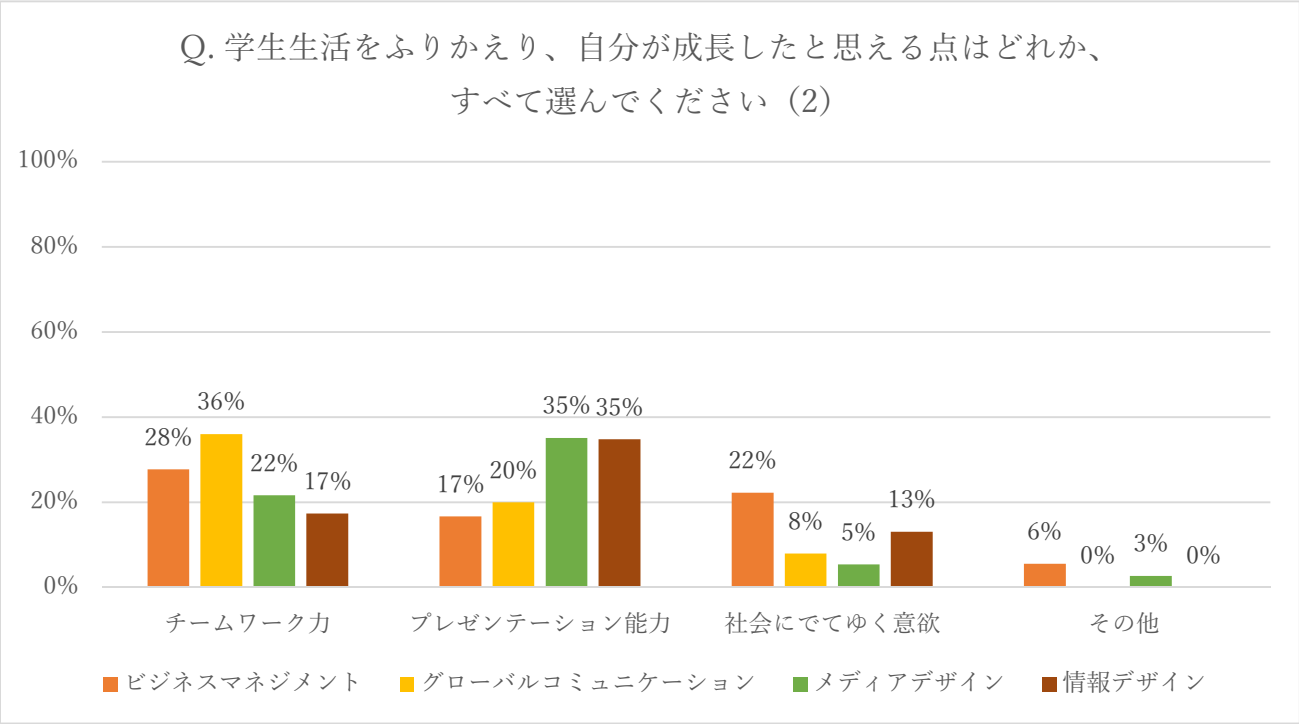
調査結果「学修状況への自己評価」より



前年度と比較すると，本年度は成長を実感した項目に各コース所属の学生ごとの大きな違いは認められなかった。特に前年度はＧＣコース専攻の成長の実感が全体的に低かったのに対し，他のコースと同程度に各項目による成長を実感していたことが伺えた。2020 年度卒業生は GC コースに所属した留学生の割合がより高くなった学年でもあった(コース内の留学生の割合:2018 年度 31.3%, 2019 年度 52.2%, 2020 年度 74.3%)。昨年度の評価の低さを，日本語能力の低い留学生への指導に教育コストがかかる中で生じた結果と推察したが，本年度の結果からはその判断も慎重になるべきと考えられる。

効果のあった項目にコース毎の大きな差がなくなった原因は，MD コース専攻の学生が前年度に比べ，専門科目や卒業研究などの成長への効果を高く評価しなかったことが挙げられる（例年の傾向として，MD コース専攻の学生はこれらの項目の地震への成長への関与をポジティブにとらえる傾向があった)。この遠因もまた，2020 年度教育全体のオンライン対応が影響していたのかも知れない。





成長に関する自己評価では，コースごとの傾向は以下の通りであった。

BM コースは専門知識，コミュニケーション能力，自分で判断する力などの成長を感じており，前年度と比べるとチームワーク力の成長をあまり感じていなかった。協働で行う活動より，個人で問題解決してきたことから成長を実感していたものと捉えられる。

GC コースは他コースと比較すると相対的にコミュニケーション能力やチームワーク力を高く評価する傾向があった。前年度は「チームで行う教育研究に従事するのが難しい留学生が多かった」ためにチー

ムワーク力等の評価が低かったと考察したが，本年度の傾向からはこれらを捉えなおす必要があるかも知れない（例えば日本人とも協働できるようなコンピテンシーが留学生に形成されてきたことを実感していたのかも知れない)。

専門知識と応用力の成長を高く認めたのは MD コース・ID コース専攻の学生で共通していたが，前年度全体的に評価が高かった課題解決する能力，コミュニケーション能力とチームワーク力の向上はあまり感じられていなかった。共同研究や共同制作を行う卒業研究を実施した 2020 年度が，感染症対策のために対面形式で活動することが困難な中で，これらのアクティブ・ラーニングで感じられがちな成長を実感できなかったことが反映されていたのかも知れない。

総括

本稿では卒業生の大学教育への満足度および 4 年間の学修状況に関する自己評価を分析した。4 コースを専攻した卒業生の満足度や自己評価を相対的に分析したが，前年度同様，教育への満足度や自己成長がそのままコース科目と直結していると判断するのは避けるべきである。年度ごとのデータにもかなりのばらつきが認められることは，昨年および一昨年前の分析でも指摘しているところである。ただし各年度の推移から，資格取得の支援が少ないことは共通している。2020 年度入学生のカリキュラムからは教職関連科目や単位認定により取得できる資格がなくなっているため，科目履修のなかで特定の資格を意識することは減ると考えられる。となると，学生が自発的に取得希望する資格に対してどれだけサポートできるかが，この支援への満足度に繋がるため，教学全体での体制づくりは急務であろう。

2018・2019 年度の調査結果の推移から明確なのは,「学修状況への自己評価」の項目が全体的に低かった点である。ひとつの原因として考えらえるのは, 卒業年次にあたる 2020 年度のすべての教育活動が, 新型コロナウィルス感染症対策のためかなり制限され，かつ活動にさまざまな制約が加わった点である。卒業生による成長の自己評価の際，根拠になる活動の多くを占めるのはやはり最終学年の卒業研究およびそれに係る教育・研究活動である。外部団体へのインタビューや調査，共同研究を行う上でのディスカッションや対面による共同制作，教員からの直接指導など，通常なら可能であった教育・研究活動が行えない，またはオンライン形式によりかなり制約を受けた形式になっていたことが，さまざまなコース担当の教員から報告されていた。本年度卒業生の自己評価の低さについては，この点は顧慮すべきであろう。また，2020 年度入学生から当年度に在籍していたすべての学年は，ほぼすべての科目をオンライン形式で受講している。当該学生が卒業年度になった際の「大学教育への満足度」に与える影響が大きいことも予想されるため，分析の際ネガティブな評価に対する判断も慎重に行うべきであることを付記しておく。

（2021.9.15 作成）